真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06（6702）1980
FAX 06（6700）1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

旬を逃すな ――青年会長様ご臨席総会開催

井筒敏成委員長を先頭に青年会創立100周年記念総会へと向かう（平成30年）

明治29年、内務省訓令による国家からの弾圧は苛烈を極め、布教はもちろん、おつとめを勤めることさえはばかられる状況でした。教内からも異端事件や離反が相次ぐ大節の中、初代真柱様はおさしづに神意を求められ、婦人会創立、別席台本の制定、本部青年会設立、天理教校設立などを進められました。厳しい「冬の時代」がただ通り過ぎるのを待つのではなく、来るべき旬を見据え、「神一条に通る人材」を育てようと、おさしづを基にさまざまな手立てを講じられました。

これらは約10年後、旬の理を頂いて大きな実を結びます。明治41年に一派独立を達成した頃、布教の第一線で目覚ましい活躍を見せたのは、おぢばで初代真柱様の薫陶を受けた天理教校の卒業生たちでした。やがて彼らの熱意と行動は、大正7年の天理教青年会創立へと繋がりました。

8月28日、中山大亮・青年会長様をお迎えし、青年会総会を開催します。ご臨席総会は青年会のみならず、芦津に繋がる者にとって大きな飛躍のチャンスです。この旬を逃さず、若者たちに声をかけるとともに、芦津全体で大きな勢いをつくり上げましょう。

青年会長様ご臨席
芦津分会総会
8月28日（日）於・大教会

四方正面

神様は「続くが理」とお教え下さる。しかし、どんな小さなことでも毎日続けるのは大変なこと。

昔読んだ本の中に「3日でやめれば三日坊主になり、やらないのと同じ。3日より多く続ければその良さがわかり、3週間続ければ続けていく自信が生まれる。3カ月続ければ習慣になり、3年続ければプロとなり、人生が変わる」と書いてあった。

例えば1日1枚リーフレットを配る。些細なことだが、1年間毎日続けていくと365枚配ることになる。それを3年続けると1千95枚にもなる。小さな行為が大きな「理」となり、自分が岐路に立たされた時、またどうして良いか判断できない時、神様が自然と思召に沿えるように導いてくださることと思う。

毎日続けることで、今後の運命は大きく変わるかもしれない。この旬に、親神様のお喜び下さる何かを始めて、プロになってみてはいかがだろうか。（川）

《４月月次祭　挨拶》

分け隔てなく 一人ひとりに心をかけよう

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、今日の時旬のつとめにお励みくださいまして、誠にご苦労様でございます。まだまだコロナの状況は厳しいところですが、共々に月次祭を無事滞りなく勤めさせていただけましたことは、大変有り難い次第であります。

さて、教祖はこの月の18日に224回目のお誕生日をお迎えあそばされます。私たち人間は誕生日を何百回もお祝いしませんが、教祖は御存命で、今なお教祖殿にお住まいくだされているという点において、この先いつまでもお誕生日をお祝い申し上げるわけです。ですから教祖誕生祭は、お誕生日を寿ぐことに併せて、改めて御存命の理に思いを致す日でもあります。

教祖はひながたの道中、温かく大きな親心で人々を導きお育てくださいました。『稿本天理教教祖伝逸話篇』に、

「教祖程、へだてのない、お慈悲の深い方はなかった。どんな人にお会いなされても、少しもへだて心がない。どんな人がお屋敷へ来ても、可愛い我が子供と思うておいでになる。どんな偉い人が来ても、

『御苦労さま。』

物もらいが来ても、

『御苦労さま。』

その御態度なり言葉使いが、少しも変わらない。皆、可愛い我が子と思うておいでになる。それで、どんな人でも皆、一度、教祖にお会いさせてもらうと、教祖の親心に打たれて、一遍に心を入れ替えた。教祖のお慈悲の心に打たれたのであろう。

例えば、取調べに来た警官でも、あるいは又、地方のゴロツキまでも、皆、信仰に入っている。それも、一度で入信し、又は改心している。」と。これは、高井直吉の懐旧談である。

（195『御苦労さま』）

とあります。教祖には、どんなに偉い人であろうが、庶民であろうが、信仰している人もそうでない人も、たとえ物もらいやゴロツキであっても、皆可愛い我が子です。ですから、どんな人がお屋敷に来ても「御苦労さま」と声をかけて労っておられます。このひながたから、私たちは何を学べばいいのでしょうか。

ようぼくの方の自宅には、友人、知人だけでなく、近所の人や宅配業者など、いろいろな人が訪ねてくるでしょう。教会ならなおさらです。参拝に来られる信者さんの中には、熱心な人もいるでしょうし、困った時にだけ来る人もいるのではないかと思います。その人たちに、等しく「ごくろうさま」と声をかけることはできます。しかし、形はまねできても、ここにこもる教祖の御心を見落としてしまっては、ひながたを辿ることにはなりません。「教祖程、へだてのない、お慈悲の深い方はなかった。どんな人にお会いなされても、少しもへだて心がない。」とあるように、教祖は隔てのない心を教えてくださっているように思います。

お道のお互いは、広く人材の育成に携わっています。人には、各々成長の段階がありますし、成人にも段階があります。優秀な人もいればそうでない人もいます。健康な人もいれば病弱な人も

います。頑固な人もいれば優しい人もいる。熱心に信仰している人もいれば、入信して間もない人もいる。人は一人ひとり違って当然ですから、その人のありのままを受け止めることが大切です。隔てる心を持ちながら「ごくろうさま」といくら言ったところで、それはひながたの上辺だけをなぞっているに過ぎません。一人ひとり違うありのままをまず受け止める。そこから少しずつでも成長し、成人してもらえるように心をかけ気を配り、真心を尽くして、根気よく努力をしていくことを、教祖は「御苦労さま」というお言葉を通して促してくださっているように思えてなりません。

私たち一人ひとりにも今の成人の位置があります。それを自覚して認めることが大切です。人の頑張りを励みに勇ませてもらうことは大変意味がありますが、単に人と比べて卑下したり、優越感に浸たる必要など全くありません。すべきことは、今いる自分の位置から一歩踏み出して前進することだと思います。教祖のように誰彼の隔てなく接することは難しいかもしれません。しかし、自分自身に隔て心があることに気付いたら、それを改めようと心に誓い、そのための努力をすることは誰にでもできるのです。

教祖は陽気ぐらしを味わわせてやりたいとの親心から、ひながたをお残しくださいました。ひながたの道に向き合って、ひながたにこもる教祖のお心を学び、それを今の生活の中に生かしていただきたいと思います。

なお、4月29日は「全教一斉ひのきしんデー」です。ひのきしんは日々の寄進ですが、殊に「全教一斉」と称するこの日は、ようぼく、信者は終日ひのきしんを意識して、生活の中で御恩報じを態度に表す日です。お互いに声をかけ合って、何からでも実動をさせていただきたいと思います。

（要約）

立教百八十五年　四月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、神人和楽の陽気世界を楽しみに、この世人間をお創め下さり、約束の年限の到来と共に教祖をやしろとしてこの世の表にお現れになりました。教祖には、月日のやしろとお定まり下されてからは、五十年の長きに亘り、筆舌に尽くしがたき御苦労御苦心も厭わず、温かき親心を以て人々をたすけ、お育てになり、たすけ一条の道をお付け下さって、陽気ぐらしへのひながたの道をお示し下さいました。更にはお姿を隠されてからも、ぢば親里から世界一れつをお見守り下され、存命の理を以て世界たすけにお働き下さいます親心の程は、唯々有難く勿体ない限りでございます。私共は、教祖の親心溢るるお導きに拝謝し、御恩報じの道を一心に歩ませて頂いておりますが、その中にも、この月の十八日は、教祖には二百二十四回目のお誕生日をお迎え遊ばされ、御本部にて教祖誕生祭をお勤め下さいますので、その理を受けて、お許しを頂きました今日の芽出度き日に、教祖のお誕生日を寿ぎ申し上げ、只今から役目にあずかる者一同、座りづとめ、てをどりを心陽気に勇んで勤めて、四月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、感染症の収まらぬ中にも、今日を大切な一日と参らせて頂きました芦津の道の子たちが、喜び心も一入にお歌を唱和して、相共につとめに勇む姿を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、幾重難渋な中も常に明るく勇んでお通り下された教祖のおひながたを心の支えに成人の足取りを進め、今もなお存命の理を以てお導き下さる教祖の親心を深く胸に刻んで、御恩報じに勇んで努め励ませて頂く所存でございます。

何卒一同の誠真実をお受け取り下さいまして、不思議自由の御守護のまに〳〵、教祖の道具衆として世界たすけに働かせて頂き、一れつ相和す世の状へとお導き下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《4月月次祭　神殿講話》

人をたすけるための真実を尽くそう

役員　瀧本眞二郎

将来積む徳に免じて

先月24日、瀧本家の遠縁にあたるKさんという方が、102歳で出直されました。

これから話すのは、30数年前、本人から直接聞いた、いわゆる臨死体験の話です。

Kさんは、産後の肥立ちが悪く次第に身体が弱って、命が危ないところまでになりましたが、死ぬならおぢばで死にたいとの思いから、修養科に入りました。しかし修養科に入ったものの身体の自由はきかず、次第に衰弱し、危篤状態になりました。Kさんの布団を取り囲む、同期生たちの口々に彼女の名を呼ぶ声を聞きながら、Kさんの意識は遠のいていったそうです。

「詰所に来て、しばらくはみんなに付いていけたけれど、だんだん動けなくなってしまった。無理を頼んでおぢばまで連れてきてもらったけど、もうあかんのか。あきらめて天井を眺めるしかなかった。目も開けていられなくなり、会長さんのおさづけも、同期のみんなの私を呼ぶ声も聞こえてはいるけど、だんだんと遠のいて、手や足の先から血の気が引いていくんよ。そして冷たくなって、みんなの声が聞こえなくなった瞬間、自分が身体から抜けて、上から寝ている自分を眺めてるんよ。そこから部屋の天井を抜け、屋根を突き抜け、眼下に詰所が見え、どんどん上へ上がっていく。そしてかなり上がったところで、ハッとして、『小さな赤ん坊をほってこんなところに来たらあかん。とにかく誰かに尋ねないと』と周囲を一生懸命探していると、目の前に十二単（ひとえ）のようなきらびやかな赤い着物を着たきれいな女の人が、突然現れた。この人なら教えてくれると思って尋ねると、『ここへ来て帰った人はいない。ここへ来た者は帰れない』と言われる。

もうこれ以上はない、と思うほど頼んだら、『そこまで願うなら、お前がこれから積むであろう徳に免じて帰してやろう』と言ってくれた。ふと見ると、修養科棟の玄関にかけてある私の赤字の名札をくるっと黒字の『在』に返してくれた。そのとたん、上がってきた空をスーッと一直線に下降していったんよ。

そして布団に寝た自分の身体に入った途端、手と足の先から温みが一気に戻って、みんなの呼ぶ声に答えられた。生き返ったんよ」。

それから先月の102歳の出直しまで、わが子たちにとどまらず、あの孫この孫を導き、布教所長として勤め切られました。

私は臨死体験の話をしたかったのではありません。Kさんが空の上で合われた女性は、たぶん教祖であろうと思うのです。そしてKさんの願いに応えられるについて、本人の生涯に積むであろう徳を受け取られ、その見返りに生き返らせてくださったとしか言いようがないのです。

「価を以て実を買うのやで」とのお言葉通りです。

たすかりが身に付くように

『稿本天理教教祖伝逸話篇』に「子供が親のために」というお話があります。桝井伊三郎先生が、母親のたすかりを願って教祖の元へ50町の道を3度も往復され、おたすけいただいた話です。

伊三郎先生が危篤の母をたすけていただきたいと教祖をお伺いし

たら、1度ならず2度までも「救からん」とおっしゃる。

なぜ「救からん」とおっしゃったのか。それは伊三郎先生のお母さんがたすからないのは、ずっと前から決まっていることだからです。

この世は一分の隙もない理詰めの世界にあって、人の生命であっても、深い何代ものいんねんの上から、「ここで始まり、ここで終わる」ということはすでに決まっているのです。

それでもたすけてくれということは、それを変更してくれということだと思うのです。伊三郎先生はそう思ったのかどうかは分かりませんが、それでも何とかたすけていただきたいと、片道5.5キロメートルの道のりを3度目に歩いて伺ったとき、親を思う子の真実として受け取ってくだされ、伊三郎先生のお母さまは88歳まで長生きされた、と記されています。

この話は親孝行の話の台として引用されることが多いかもしれませんが、少し視点を変えて思案してみたいと思います。

例え方は悪いかもしれませんが、八百屋でキャベツを買えばいくらかの代金が要ります。人にものを頼めば、ただでは済まないでしょう。お礼なり何がしかの対価が必要だと思います。

まして、無い命をたすけていただくとなれば、どれほどの対価が必要となるのでしょう。それを教祖は、真実という対価を受け取られたということです。

Kさんの話に戻れば、将来積むであろう徳をも対価として受け取っていただけた。また徳積みに励まれたからこそ、102歳までの長命を頂いたのです。たすかりが本当に身に修まった姿と申さねばならないでしょう。

『教祖伝』や『逸話篇』にも、そういうお話がよく出てまいりますが、いつの場合も、たすけっ放しではありません。いんねんを切って、たすかりが身に付くように教えてくださっているように思います。

余れば返やす、足らねば貰う。
平均勘定はちゃんと付く。
明治25年1月13日

と教えられる通りです。

ちなみに、Kさんのご主人は出直されていますが、晩年身上の上から修養科に入られました。

これもご本人から聞いたことですが、「神殿掃除で早くから起きて、皆と詰所を出たが、交差点まできたら、信号が点滅し始めた。若い人に遅れてしまい、赤になった信号を渡ろうとしたら、突然ハッピの帯を誰かにつかまれて、歩道に転げてしまった。その瞬間、目の前を大きなトラックが走り去った。もし、あのまま進んでいたら、トラックにひかれていた。わしは思わず『誰が帯を引っ張って助けてくれたのか』と周りを見回したけれど、誰もいない。とっさに教祖やと思った。家内だけやなしに、わしも教祖にたすけていただいた」と話してくれました。

人をたすける真実

教祖御在世当時とは違って、現代では少々の身上でも治る時代にはなりました。しかし人間として根本的な苦悩は、昔も今も変わらないと思います。たすかりたい、たすけていただきたいという素朴な人間の願いは変わらない。

ただ、その願いに対して、お受け取りいただく真実を持ち合わせているか、だと思います。それは先々の歩み方であるかもしれませんし、これから果たす心定めであるかもしれません。

教祖御在世当時、多くの人々が教祖の元にたすかりを願い出て、

実際たすけていただいています。けれども、そのたすけていただいた多くの人は今では切れてしまっているとも言われます。

なぜ切れたのでしょうか。たすけていただいたときは喜んだのでしょうが、御恩報じをするでもなく、真実を受け取っていただくでもなく、そのままで、いつの間にか元のいんねんの姿に戻ってしまっただけのことだと思います。

受け取っていただく真実とは、物や金ではないと仰せられた。たすかったことを人に伝えよ、つまり「今度は人をたすけよ」とおっしゃる。この真実こそが対価となってお受け取りいただき、さらにはいんねんすらも切っていただく、本当のたすかりとなるのです。

道の初代たちは、その通りになさった。たすけていただいたその日から、家業をほったらかしてでも、おっしゃる通りに人だすけに奔走されました。たすけていただいた御恩に報いるためです。

その精神は昔も今も変わることはないのです。そして我々は御存命の教祖にお受け取りいただける真実を精いっぱい出させていただきたいと思います。

めへ〳〵にむねのうちよりしいかりとしんちつをだせすぐにみへるで

七号　32

このおうたの通りです。

何もかも準備されている

人類の先祖は300万年前、アウストラロピテクスという類人猿だったそうですが、それから進化を重ね、ネアンデルタール人が４万年前くらいまでいたそうです。そのネアンデルタール人の脳みそと、現代の人間の脳みその大きさは、ほぼ一緒だと言われています。

つまり、親神様は最初から何もかも準備してくださっていたということです。大地の中には原油をはじめ天然ガス、ダイヤモンド、レアアースなど、いずれ人間の生活に必要な一切のものを準備してくださっています。そしていずれこの脳みそを十分に使えるように、何万年も前から、今の大きさに準備してくださっていたのです。

われわれ現代人は、脳みその10パーセントほどしか使っていない、というか使わせてもらっていないのです。もし脳みそを100パーセント使えたらどうなるかというと、スマートフォンなどの通信機器が必要なく、相手を思うだけで瞬時に思いが伝わり、やりとりできるようになるかもしれません。車や飛行機を使わなくても、瞬間的に移動できるかもしれません。人間の脳には無限の力が秘められているというのです。

しかし、今はまだ使わせてもらえない。それは人間の心が成人していないからです。もし今使わせたら、自分の欲望のために使うため、地球は３日で壊れてしまうかもしれません。

人類はまだこの程度なのです。だから、抑制されていることは逆に御守護なのです。元の理でお示しくださっているように、陽気ぐらしを共に楽しみたいから人間をお創りになった。ですから必ずそういう時代は来ると思います。用意していただいた道具や資源を十分に使わせていただいて、陽気ぐらしができる、神人和楽の時代がやってくるのです。

そのために身上事情を通して、心を鍛え、つくらせていただくのだと思います。そして成人次第に見えてくる世界が必ずある。そんな楽しみをもって日々を勇ませていただきたいと思います。

◇　◇　◇

最後に耳寄りなお話です。

昨年９月の神殿講話で、「陰暦26日は、南の空の左手に太陽、右手に月が必ず位置する」という話をしましたが、実はこの４月26日がまさに、陰暦３月26日と重なります。そして５月26日も、陰暦４月26日と重なります。興味のある方は、おぢばに参拝されましたら、午前10時頃、南の空をご確認いただきたいと思います。

（要旨）

立教185年 教会長年頭会議

コロナ禍により延期になっていた教会長年頭会議は、詰所大広間で4月17日、26日に開催された。両日合わせて、教会長125名、代理11名、大教会在籍者33名が出席。来年より始まる教祖百四十年祭の年祭活動に向かっての一手一つの活動を誓い合った。

両日共、13時より、大教会長が講話（8頁～13頁に掲載）。

まず、年祭活動を来年に迎えた本年は、教祖のひながたと向き合い、心づくりに励ませていただく旬であるとし、「今年は年祭活動に向けておたすけと丹精に勇んで励ませていただく年としたい。それが教祖のひながたの道を踏むことになる」と教会長、在籍者らに奮起を促した。

また、事改めて青年会長様がご臨席なさる今年の青年会総会に触れ、「これから芦津の将来を背負っていく若い世代にしっかり心をかけ、その丹精に努めていただきたい」と期待を述べた。

その後、竹内義忠・布教部長が各部各会の連絡を伝え、井筒敏成・芦津分会委員長が、青年会長様ご臨席の芦津分会総会に向け、青年会員に参加していただくよう、声かけなどのご協力をお願いした。

最後に加世田洋役員が閉講の挨拶を述べ、閉会した。

こかん様に続く会

芦津女子青年（井筒さちえ委員長）は、4月24日「こかん様に続く会」を開催、女子青年10名が参加した。この日は朝から雨天のため、徒歩で十三峠を登る予定を急遽変更し、バスでの移動となった。

大教会で参拝後、井筒委員長が挨拶。初代会長様の「あの雨の中を」の逸話を引きながら、「雨でも勇んで活動しましょう」と話し、大教会を出発。マイクロバスで十三峠展望台まで移動して、こかん様の石碑跡でよろづよ八首を奉唱した。

詰所に戻り、昼食後、11月の女子青年大会で使用するワッペンを全員で作成。その後、井筒年子・婦人会支部長を囲んで記念撮影を行った。

◇　◇　◇

また、教祖のお誕生日に合わせ、お誕生ケーキを作成し、4月18日、本部教祖殿へお献じした。

ケーキ作成の中心となったのは荒木めぐみさん（恵庭分教会）。荒木さんはパティシエの腕を生かし、女子青年と共に詰所でケーキを作成。フルーツが盛りだくさんの見事なケーキが完成した。

荒木さんは「昨年、教人資格講習会受講中に大教会長様ご夫妻より、『来年は教祖にお誕生ケーキをお供えしては』とのお話を頂きました。教祖にお喜びいただけると嬉しいです」と語った。

ひのきしん隊に入隊

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、4月23日、おやさとふしん青年会ひのきしん隊に8名が入隊。

本年8月28日に青年会長様ご臨席芦津分会総会を迎えるにあたり、芦津に繋がる青年会員の理づくり、伏せ込み、また会員同士の繋がりの場にと、4月より担当月である9月まで毎月入隊する。

今月は、造園課の盆栽置き場で草刈りを行い、伏せ込みの汗を流した。

入隊者は次の通り。

井筒　敏成（直　轄）
榎　康紀（芦ノ郷）
望月　慶太（門　司）
山田　元喜（當　別）
田中　敏行（芦　玉）
北島　泰仁（津　阪）
山本　和広（昭　大）
伊地知潤平（芦山都）

《教会長年頭会議における講話》

三年千日に向け 心づくり、理づくりを

大教会長　井筒梅夫

ひながたを徹底して

今年の年頭ご挨拶で真柱様は、教祖百四十年祭を執行する旨を正式にご発表くださいました。そして、来年はその百四十年祭を目指す三年千日という動きに入っていくと、来年から年祭活動が始まることもご教示くださいました。

今年は年祭活動を迎えるための下地づくりの年になります。教祖年祭への心をつくらせていただき、勇んだ年祭活動の御守護を頂くための理づくりに励ませていただく年です。

年祭活動三年千日の仕切りについては、おさしづで、

五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。（中略）僅か千日の道を通れと言うのや。（中略）ひながたの道より道が無いで。

明治22年11月7日

と示されているように、ひながたの道を辿ることが年祭活動の主眼です。もちろん、ひながたは常日頃から心がけるものですが、３年と仕切って、徹底して通らせていただくのが年祭活動の芯の部分です。ですから今の旬は、教祖のひながたを心新たに学ばせていただく姿勢と態度が重要になります。

私たちの信仰はひながたが目標（めじるし）ですから、「こんなときは、教祖はどうなさるだろうか」という思案をしますが、もし自分に都合の良い教祖像を描いていては、ひながたから道が逸れてしまいます。今は、教祖のひながたと向き合う旬であり、今一度『稿本天理教教祖伝』『稿本天理教教祖伝逸話篇』に親しみ、教祖のひながたを学びたい。ただ道すがらを知るだけでなく、そのときそのときの教祖の御心を学ぶことが肝心です。

さらには、教えを素直に身に付けることが大切です。ひながたの道は、単なる昔話ではありません。ひながたにこもる教祖の御心は、御存命の教祖の御心として今も息づいているのですから、「果たして私は、御心を今に生かしているだろうか」という思案に立つことを忘れてはなりません。

相手の身になる

教祖はひながたの最初に、どん底まで貧の道を進まれましたが、「貧に落ち切らねば難儀なる者の味が分からん」とあるように、経済的に困窮していた、当時の大半の人々の身になるためです。

教祖の「相手の身になる」という御態度は、それから先も変わることはありません。「柿選び」という逸話に、お盆に載せてある柿の中から教祖は一番悪いと思う柿を選ばれ、残りの柿を信者にお与えになっているお姿が描かれています。また最後の御苦労の際には、退屈そうにしている見張りの巡査にお菓子を買おうとなされましたが、相手は御自身を監獄に投獄した側の人間です。そうした人の身にまでなっておられるのです。

常に相手の身になるという御心が、教祖の終始一貫して変わらない御心であり、御態度でした。

私たちの御用であるおたすけの際に大切なことは、困難を抱えている人や不安を託（かこ）つ人の心に寄り添うことですが、これとて相手の身になればこそ、その心に寄り添うことができるのです。おたすけに限らず、私たちは社会生活を営んでいるわけですから、必ず人との関わりを持ちます。その際に、相手の身になって考えているだろうか、行動できているだろうかと、日常生活の中で思案するところか

ら、相手の身になるというひながたを辿ることができるようになるのではないでしょうか。

教祖の親心を学び、我が身を振り返って、自分自身の生活態度を教祖の御心と教えに沿わせようと、素直に教えを実践する努力が、ひながたを辿る態度だと思います。

年祭活動を来年に迎えた今の旬は、教祖のひながたと向き合って、教祖の御心に近付くことができるよう、心づくりに励ませていただく旬です。そして教祖の御心を今に生かして、成人の歩みを進ませていただきたいと思います。

人をたすけ、人を育てる

教祖は50年のひながたで、世界一れつをたすけることと、そのための用材を引き寄せて育てることに心を砕かれました。すなわち「おたすけと丹精」です。私たちがおたすけをし、丹精を重ねると自体が、教祖のひながたの道を歩むことになります。

おたすけは、そのほとんどが身上で悩む人や事情で困っている人に手を差し伸べ、お世話をするところから始まりますが、それはあくまでも入口です。おたすけの本来の目的は、身上や事情などをきっかけとして御守護を頂いてもらう努力をし、教祖の教えを聞き分けてもらい、信仰の喜びを味わってもらって、ようぼくとして共に人だすけができるように導き育てていくことにあります。「ようぼくまで育てることが、おたすけである」ということは、おたすけと丹精は切っても切り離せない関係であることが分かります。

また、おたすけには外に向けてのおたすけと、内に向けてのおたすけがあります。外に向けてのおたすけとは、未信者に対するおたすけで、内に向けてのおたすけは、部内やようぼく、信者さん方といったいわゆる理の子や、教友に対するおたすけです。

私たちが普段行うおたすけは、内に向けてのおたすけが大半だと思います。理の子に向けてのおたすけは実に大切で、一番の丹精になるということを忘れてはならないと思います。「あの辛いときに、会長さんがおたすけに来てくださった」。これで理の親子の関係が深まります。ですから、内に向けてのおたすけは、「おたすけ＝丹精」であるとお考えください。

また外に向けてのおたすけは、全く繋がりのない未信者よりも、ようぼく、信者家庭で信仰していない人や、友人や知人、また近所の方や紹介をされた人など、そうした方々が対象になることが多いように思います。

その一方で、神名流しや路傍講演、戸別訪問など、昔ながらの方法からおたすけに繋がることがあります。最近では里親やこども食堂をはじめ、地域社会に向けた活動を展開している教会もあり、教会が社会との接点を持つための手段として、大変有意義なことです。

いずれにしましても、私たちがおたすけと丹精を進める上には、親神様の御守護がなければ、また教祖のお働きを頂かなければ、どうにもなりません。そのために、理づくりと陰の徳積みは忘れてはなりません。これを心に置いて、今年は年祭活動に向けておたすけと丹精に勇んで励ませていただく年としたいと思います。

すぐに動く

おたすけと丹精をする上で、私が大切だと思う4つのことを挙げたいと思います。

まず1つ目として、スピード感です。信者さんが身上になったとき、すぐに行けばおたすけになりますが、何日も日を置けば、お見舞いになってしまいます。おたすけとお見舞いでは、受け取る側の気持ちは全く違いますから、すぐに動くことが肝心です。

ただ、現在はコロナ禍ですから、病院にも行けない、という状況もあります。そうした場合でも、本人か家族にすぐに電話をして病状を聞き、「お願いづとめをさせていただくから、大丈夫」と安心感を与えて、お願いづとめを勤める。これも実に大切なおたすけの一つです。そして行ける状況になれば、おたすけに駆け付ける。これが丹

精になるわけです。とにかくすぐに動くことが大切で、動けば親神様も働いてくださいます。

これはコロナ禍前の話ですが、ある部内教会長が入院をしたと聞き、すぐにおたすけに駆け付けました。おさづけを取り次いで病室から廊下に出ますと、ある布教所長子弟とばったり会ったのです。そこで親が入院していることを聞き、すぐにおさづけの取り次ぎに行かせてもらいました。２、３分でも時間がずれていれば、鉢合わせることもありませんでした。

また、沖縄分教会の前会長のおたすけに沖縄へ行った時のことです。病院でおたすけをさせていただいた後、廊下で大島の部内教会の奥さんとばったり会ったのです。どうしたのか尋ねると、子供さんが難しい身上になり、奄美大島の病院では治療ができず、ドクターヘリに乗ってこの病院に来たところだったのです。すぐにおさづけを取り次ぎに行きました。

いずれも非常に喜んでいただきましたが、これらは神様が働いてくださったとしか思いようがないのです。やはりすぐに動くことです。じっとしていては、神様は働きようがありません。

具体的な言葉

２つ目は、「目に見える言葉を使う」ということです。

例えば、「動物の絵を描きなさい」と言われても、動物という単語は抽象的なので、何を描いていいのか分かりにくい。でも「今年の干支、トラの絵を描きなさい」と具体的に示されると、描くことができます。これが目に見える言葉です。これはおたすけと丹精にも大いに通じることです。

ある役員から聞いた話ですが、教友のおたすけに行ったとき、「御守護いただくには、しっかりとおつくしに頑張りなさい」と言ったそうです。すると、「分かりました。おつくしを頑張ったらいいんですね。先生、ありがとうございました」と答えてくれた。実はそれまでにもお道の仲間が見舞いに来て、おさづけを取り次いでくれた。皆、「頑張れよ」と言って帰っていったが、本人は具体的に何を頑張っていいのかが分からなかった。だから「おつくしを頑張れという言葉が、すっと胸に治まりました。ありがとうございます」と言って喜んでもらったそうです。

ただ頑張れと言うだけでは、何をどう頑張っていいのかが分かりません。「あなたのこの癖性分をなくすように努力しよう」「日参をさせてもらおう」「一緒におぢばに帰らせていただこう」など、具体的な「目に見える言葉」で心の成人を導いていくのがおたすけであり、丹精であると思います。

心をかけ、声をかける

３つ目は、徹底して心をかけて、声をかけることです。

心のかけ方はさまざまですが、私が常にお願いしていることは、日々のおつとめを勤める際には必ず、朝にようぼく、信者のつつがなき一日を願い、夕にようぼく、信者に代わってお礼を申し上げていただきたい。親から、まず心をかけることです。

そしてお道には旬があります。ここぞという時があります。そうしたときには必ず声をかけていただきたいと思います。声をかけなければ何も始まりませんし、何も変わりません。旬々折々には声をかけて、成人を促していただきたいと思います。

足を運び、世話をする

あと１つは、普段から足を運び、心を通わせ、世話をする。この３つが、殊に丹精の基本です。

ようぼくの中には、遠方に住んでいるなど、なかなか足を運びにくい人もあるかと思いますが、その方もいんねんあって親神様が教会に繋げてくださったのですから、たとえ遠方にあるからといってほっておかずに、折を見て年に数度、少なくとも年に１度は足を運んでいただきたいと思います。

また、自分の思いを一方的に伝えるのではなく、心を通わすことが大切です。そしてようぼく、信者さんに何かあれば世話をさせて

もらう。「困ったときに頼りになるのが教会長」、これを教会長さん方は自負して、おたすけと丹精に励んでいただきたいと思います。

たすけの理はぢばから

おたすけと丹精は、親神様の御守護を頂き、教祖の存命のお導きを頂いて成り立つものです。そのためには理づくりと陰の徳積みをしなければなりません。

この理の元は、言うまでもなく「おぢばの理」です。お互いにおぢばの理をしっかりと頂戴したい。そのために、まずはおぢばへ足を運んでいただきたい。

お道の信仰者はなぜおぢばに帰るのか。御存命でおられる教祖が、可愛い子供の帰りを、諸手を広げてお待ちくだされているからです。お屋敷に帰ってきた人々を温かな親心で抱きかかえてくださるお姿は、『教祖伝』『逸話篇』を通していくつも拝することができます。

「教祖は、私のことを心にかけてくださっている」と知った先人たちは、親心にいたく感激して、一段と成人の歩みを進められました。そして今も教祖は御存命のまま、私たち一人ひとりのことを心にかけてくださり、私たちの帰りをお屋敷でお待ちくだされています。改めて『教祖伝』『逸話篇』を読み込んで、存命の理をもって私たちを温かく迎えてくださる教祖の親心を、どうか感じ取っていただきたいと思います。

さらにおぢばには、厳然たるぢばの理があります。他にはないたすけの理があります。

残らずぢばから救ける。万事何から大切、第一のたすけ、ぢばより救ける。さあさあ心置き無う運んでくれるがよい。

明治24年11月23日

だから私たちは、おぢばに帰ってたすけの理を頂戴するのです。

また、

元という、ぢばというは、世界もう一つと無いもの、思えば思う程深き理。

明治28年10月11日

とあります。つまり、普段からおぢばへの思いを深めるところに深い理を頂けるのです。おぢばを有り難いと思えるかどうか、おぢばの理を頂くにはこの一点にかかっています。私もこれまでに、おぢばで御守護を頂かれた人の姿を何度も見聞きしてきましたが、おぢばの理を軽く考えてたすかった人など、聞いたことがありません。おぢばでたすけていただいた人は皆、おぢばに思いを深めた人たちばかりです。

現在はまだコロナ禍が終息しておりませんので、おぢばへ帰るのが難しいこともあるでしょう。そうであれば、おぢばの情景を思い描き、おぢばで戴いた御守護を思い起こして、おぢばへの思いを深めることができます。おぢばに心を向けておつとめを勤めるところに、思いは一層深まると思います。そしてコロナの感染状況を見ながら、どうか折々におぢばに足を運んでいただきたい。大きな理づくり、徳積みになります。

教会でぢばの理を

教会はおぢばの出張り場所であり、おぢばの理を受けて成り立つのが教会です。信者さんには遠方であったり、仕事の都合や家族の信仰状況などでなかなかおぢばへ帰れないという方もおられます。また仕事の都合などで、頻繁におぢばに帰ることもできないでしょう。ですから普段は教会へ足を運んで、おぢばの理を戴いてほしいのです。しかも、ただ参拝するだけではなく、ひのきしんなど教会の御用の一つも担って、おぢばの理、たすけの理を頂戴してほしいと、私は巡教先のようぼく、信者の方々に話しております。

しかし、これには前提があります

す。あくまでも、その教会がおぢばの理をしっかりと受けることができる教会である、ということです。教会がおぢばの理を戴いていれば、教会に参る信者さん方にぢばの理を戴いてもらえるのです。

おぢばと教会の関係は、

本部という理あって他に教会の理同じ息一つのもの。この一つの心治めにゃ天が働き出来ん。

明治39年12月13日

とあります。これは教会が、本部の息一つに合わせなければ親神様は働きようがないという厳しいお言葉ですが、裏を返せば、おぢばの息一つに合わせさえすれば、天が働いてくださる、という頼もしいお言葉でもあります。つまり、本部から大教会、直属教会、部内先々の教会へと、息一つに繋がること。おぢばから先々の教会まで一本筋が通った関係になること。これが各々の教会がおぢばの理を戴くこととなり、ここに天の働きを戴ける理があると思います。

各教会がおぢばの理を戴く教会になれば、所属するようぼくや信者さん方は、教会でおぢばの理を頂戴できます。天の働きを頂いてさまざまな御守護を頂くことができます。

そこで皆さんにお願いです。常はおぢばへ心を繋いで、折々に帰らせていただくとともに、どうか親元に運んで、親の御用を担っていただきたいのです。

私も本部の立場から、いくつかの大教会の世話人を持たせていただいております。巡教の折に、教会の上で困難な問題を抱えておられる教会長さん方から相談を受けることがあります。その際には、大教会や上級への日参を勧めています。しかも、ただ参拝するだけでなく、教会内のひのきしんなど、何か一つ徳を積んで帰ることも促しています。

すると、翌年には、実行した教会長さん方から「教会が良い方向に進むようになりました」と、喜びの声を聞かせていただくことがあります。やはり親の理を戴くことが大切だ、と実感する瞬間です。親に運び、親の御用を担うことは大きな理づくりになるのです。

皆さんの中の多くは、大教会の詰員として神殿当番を勤めてくださっています。これも大教会の御用の一つを担っていただくことで、それぞれの教会がより良い姿を見せていただくための理づくりであるとお考えいただいて、お勤めいただきたいと思います。

またおぢばへのつくし・運びの上にも、お互いに丹精をさせていただいているところです。

ぢば一つに心を寄せよ。ぢば一つに心を寄せれば、四方へ根が張る。四方へ根が張れば、一方流れても三方残る。二方流れても二方残る。太い芽が出るで。

『逸話篇』一八七「ぢば一つに」

と仰せいただきます。おつくしも、親々の理を添えておぢばへ運ばせていただくことが大きな理づくりになり、徳積みになるに違いありません。

今、やらねばならないこと

コロナウイルスは今も収まっていませんが、今年の年頭に真柱様は、「できないのはコロナのせいだ」というようにせずに、与えられた条件のなかで、やらなくてはならないことをいかに進めるかということを、いまの時旬を考えて、それぞれのつとめを果たしていっていただきたい」と仰せになって、足踏みをしがちな私たちの背中を押してくださいました。

よく「やればできる」という言葉を耳にします。これは「やってできた人」のセリフだから説得力を持ちます。でも、やってもできないこともあります。一方で、やらなければできないことも事実なのです。社会で成功した人や信仰者として道を大きく伸ばした人には、「その時その時に、やらねばならないことをやってきた」という共通点があります。

つまり大切なことは、「今、やらねばならないことをやる」ということで、それを積み重ねることです。コロナ禍という厳しい状況の時だからこそ、年祭活動に向かう今の時旬をしっかりと考えて、与えられた条件の中で、今、やらね

ばならないことをしっかりとやって、たすけ一条の道の歩みを進ませていただきたいと思います。教祖の年祭活動に向かう今の時旬を、一手一つに心勇んで進ませていただきましょう。

青年会長様御臨席総会

本年8月28日に、中山大亮青年会長様に大教会にお入り込みいただいて、青年会総会を開催します。

思えば、前回のご臨席総会は、今から38年前の10月21日、今の真柱様が青年会長のときです。その前月の9月13日に、父である敏夫五代会長が出直しをいたしました。その際、青年会本部から「こんな大節の中で総会ができるのかと、青年会長様が心配しておられる」というお尋ねがあったのです。「こんなときだからこそ、開催させていただきたい」とお答えしたところ、予定通りお入り込みくださされたのです。

当時、芦津は悲しみの底にありましたが、青年会長様が大教会へお入り込みくださり、当日集まった1千400名を大きな親心で励ましてくださいました。私自身も心に元気を頂いて、翌月の11月26日に六代会長の任命のお許しを戴いたことを思い出すのです。

今はコロナ禍という大きな節の最中です。しかし、いつまでもこの状況が続くことはないでしょう。親神様のなさっていることですから、いずれ旬を見て収めてくださると思います。

そうなれば、コロナの先は、若い人たちの時代が来ます。教祖百四十年祭を勤めて、その先の百五十年祭を目指して、これからのお道を担う世代の者が大いに働いて、大いに活躍をして、お道の新しい時代を切り拓いていってくれると思うのです。私たちは、こうした動きの後押しをしっかりとさせていただかねばなりません。

8月28日の青年会長様ご臨席総会に向けてはもちろんのこと、これから芦津の将来を背負っていく若い世代によく心をかけて、その丹精にしっかりと努めていただきたいと思います。（要旨）

四月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扉者	山田道弘	座りづとめ	大教会長 奥田正徳 瀧本眞二郎 会長夫人 前会長夫人 井筒ちぐさ	地方	湯川正圀 川畑澄博 岩切正義
指図方	今川政治	扉者	岩切正教	前半	山本義範 瀧本耕四郎 木村真次 望月恵美 岩切孝子 松森明美		守田清一 吉田裕和 河端芳雄
献饌長	井筒文夫	賛者	梶川和人	後半	梶川芳男 村田光伸 湯川正信 岩切治代 奥田千晶 石川石美		河合善洋 今川聖一 榎康紀
伝供	在籍者一同	賛者	葭内浩				

笛	奥田眞治 岩切正教 井筒文夫	琴	岡島きよの
ちゃんぽん	浜田宣郎 梶川和隆	三味線	浜田たつゑ
拍子木	西本義之	胡弓	榎理恵子
太鼓	竹内義忠 瀧本庄司		松本さだえ 吉田幸子 河合遊喜恵
すりがね	石川道夫 立花善文		
小鼓	加世田洋 中村俊和		
	吉田裕樹 西本興正 奥田正儀 花岡忠和 瀧本亘 新居里実		瀧本理恵 瀧本美奈 西本美智恵

事情はこび

立教185年4月26日お許し
本津分教会
任命

八代会長
梶川芳征（かじかわ よしゆき）　41歳

天理大学卒。平成11年おさづけの理拝戴。ブラジル・眞伯教会で2年間、詰所会長宅で6年間青年として勤めた。中学・高校教員免許を保持、また天理教語学院で日本語教員免許を取得。現在、地域青少年指導員を務めている。

就任奉告祭　5月8日

会長室報

青年勤務辞退

【大教会】
荒木　理継（恵　庭）
立教185年4月16日

教務部報

教会長資格検定合格

元木　慎一（晝　間）
山本　和広（昭　大）

立教185年4月16日教会長資格検定講習会第120回を修了し、翌17日検定合格されました。

おさづけの理拝戴《3月》

知念　望（沖　縄）

初席《3月》

〈2名〉東大屋
〈1名〉上有明、太美、尼崎
〈順序運びより　5名〉

大教会でこども食堂

4月9日、大教会内勤者は真明寮を利用して、「あしつこども食堂」を開催した。

昨年秋より実施に向けての話し合いを重ね、今年1月には試験的に開催をしたが、大阪にまん延防止等重点措置が適用され、2月、3月はやむなく中止としていた。

当日は正午から13時30分まで、感染対策を取りながら開催し、子ども6名にハヤシライスをふるまった。

まだまだ知名度が低く利用者は少ないが、近所の方が風船を提供してくださるなど、温かい応援の和も広がりつつある。

今後も毎月第2土曜日に開催を予定している。

詰所学生棟完成

詰所の勤務者棟は、昨年10月より内部の大幅な改装工事を行っていたが、3月末に2階全室と1階の一部分が改装を終えた。

各部屋とも天井、壁、照明器具などが新しくなり、共同のトイレ、洗面所、洗濯場、キッチンが設置された。3月26日からは、おぢば周辺の大学に通う教会長子弟たちが入居し、「学生棟」として利用されている。

入居した学生からは、「思っていた以上に部屋が広く、快適」「これまでは一人暮らしで、食事も自分で作っていたが、詰所で食事ができるのが本当に有り難い」との喜びの声が聞かれる。

月例統計（自令和4年1月1日～至令和4年3月31日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	のお理さづけ拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	6		
靱（13）				
東津（23）	1	2		
吉野川（29）		1	1	
島原（16）	4			
日方（15）	3			1
稗島（7）				
本津（2）				1
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）				
門司（6）	1			
當別（6）	1			
大島（26）		1	1	
沖縄（3）		1	2	
尼崎（2）	1			
四ツ山（5）		1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）				
青木（1）				
芦浪（1）				
甲邊（1）				
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）	1			
紀周（3）	1			
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）		2		
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	1			
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1			
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	24	14	4	2